

7. 悦田喜和雄の童話作品—「松太と鉄砲」の紹介

富塚 昌輝

1 悦田喜和雄の文学活動

本稿では、徳島県で農業を営みながら文学活動を続けた作家である悦田喜和雄の童話作品を紹介する。はじめに、悦田喜和雄の文学的事跡について略述する¹。

悦田喜和雄は、1896年8月21日、徳島県海部郡三岐田村大字木岐（現在は海部郡美波町木岐）に農家の長男として生まれる。1911年3月、三岐田村立由岐尋常高等小学校を卒業。この頃から農業に従事する傍らに、文学を読み始める。1917年頃に『文章世界』などの投書雑誌への投稿を始める。1919年5月、「木賃宿の朝」が『文章世界』に掲載され、その後も4編の投書が『文章世界』に掲載される²。1919年の春頃、武者小路実篤が主宰する「新しき村」に参加し、宮崎県の「新しき村」にも数度訪れる。1922年6月、志賀直哉の推輓もあって「雑炊」が『白樺』に掲載される。1924年、5月に「新しき日」を『新小説』に発表、8月に「叔母」を『改造』に発表、10月に「百姓」を『中央公論』に発表、12月に「脱出」を『新潮』に発表する。この年の11月に中央公論の編集者として有名な滝田樗陰から手紙をもらっている³。悦田に対して滝田樗陰がどのような評価を行っていたのかを知るため、以下にその一部を引用してみる。

拝啓「くだかれた心」有り難う。大変にいゝ出来で、心から嬉しく思ひます。描き方の巧い事只々敬服の外ありません。農村青年の恋に眼覚めた心持をこの位正しく詩的に描いた作品は今迄全く一つもなかつたと思ひます。切に貴下の自重を祈ります。

三月号に短篇（といつても百枚を超えてもいゝのですが）か四月号に二百枚位の長篇を試みて下さいませんか。貴下の方で御迷惑でなければ今后しばらくの間貴下の御創作を一手に引き受けたいと思ひます。貴下の描写は僕は好きで／＼堪らないのです。

このような滝田の待遇を足がかりとして、1925年には「くだかれた心」（『中央公論』1月）、「敗れたる人々」（『中央公論』4月）、「バクチ（博奕）」（『中央公論』6月）、「悲しき願ひ」（『中央公論』12月）、「鏡」（『文藝春秋』12月）などの作品を続々と中央文壇雑誌に発表する。1926年にも、「猫」（『サンデー毎日』1月）、「ギチと吉公」

¹ 悦田喜和雄については、「悦田喜和雄略年譜」（『四国文学』1965年8月）、佃實夫「悦田喜和雄論ノートⅠ—その人と作品—」（『四国文学』1965年8月）、後藤公丸『忘れられた農民作家 評伝悦田喜和雄』（2001年12月、四国文学会）、由岐町史編纂委員会編『由岐町史・上巻〈地域編〉』（1985年9月、由岐町教育委員会）、同『由岐町史・下巻〈図説・通史編〉』（1994年3月、由岐町教育委員会）を参照。

² 悦田喜和雄の投書活動については、富塚昌輝「悦田喜和雄の投書家時代—『文章世界』『婦人公論』に掲載された投書作品の紹介」（『中央大学国文』2020年3月）を参照。

³ 滝田樗陰から悦田喜和雄に宛てた書簡については『四国文学』（1965年8月）に影印が掲載されている。

(『中央公論』3月)、「宝篋印塔」(『新小説』8月)を発表する。

1926年12月、父の悦田慶一が死去し、家業である農業を継ぐ。1925年10月の滝田樗陰の死の影響もあって、悦田の中央文壇雑誌への作品発表数は減少する。しかし、この後も「へいげえ(妖怪)」(『大調和』1927年5月)、「白鳥の歌」(『大調和』1928年5月)、「自画像」(『馬鈴薯』1941年5月-10月)などを「新しき村」関係の雑誌に発表したり、「彼等」(『農民』1927年12月)、「百姓」(『地上』1939年1月)などを農民文学関係の雑誌に発表したりして、継続的に文学活動を行う。また、戦中期には徳島県文学協会副会長を務めるなど、徳島県の文学界を牽引した。1952年、徳島県文芸懇話会の代表となり、同人雑誌『四国文学』を創刊。戦後は、「百姓」(『新しき村』1949年5月)、「おとみの裸像」(『四国文学』1958年5月)、「銭」(『農民文学』1962年12月)、「百姓は死んだ」(『徳島新聞』1971年4月24日-8月16日)、「田への遺愛」(『この道』1972年6月)など、地方新聞や同人雑誌に作品を発表し続ける。1965年3月、初の作品集『新しき日』を四国文学会から刊行し、同年6月に徳島新聞社賞文化賞を受賞。1971年5月には、第2作品集『綾の鼓』を皆美社から刊行する。1983年3月21日、徳島県の由岐町立病院にて死去。享年86歳。

悦田喜和雄は1924年から1926年にかけて中央文壇雑誌に作品を多く発表しているが、その他の時期は主として同人雑誌や地方新聞を舞台として活躍している。こうした傾向に呼応して、悦田の中央文壇進出期の文学的テーマには、農村生活を描きつつそこからの脱出を意図する作品が多いのに対して、戦後の悦田の文学的テーマには農村生活への定着を基礎として、そこで創作活動を行うことの意欲と葛藤とが描かれる作品が目立つ。自らの出自を脱して外の世界を意欲する眼と、自らの足もとを見つめる認識の眼との双眼は、その重心を変えながら悦田の文学に通底していると思われる。

今回紹介する「松太と鉄砲」は脱出を主題とした作品群と、定着を決意した後の作品群との中間に位置する。その意味で、童話でありながら、悦田の文学的経歴をたどる上で興味深い作品である。

2 悦田喜和雄の童話作品

悦田喜和雄が童話作品を書いていたことは既に知られている。しかし、その所在については長く不明であった。後藤公丸は「悦田喜和雄作品目録」(『四国文学』1983年11月)の注記において次のように記している。

なお家人によれば、戦時中に作品集出版の話があって、古い雑誌や未発表原稿(すばらしい童話があった…慶一氏談)が東京の出版社に送られ、そのまま戦災焼失し、また、志賀直哉の手紙なども全集出版の資料として出版社に渡され、現在家郷には殆んど何も残されていないとか。

今回の調査で、悦田喜和雄が、朝日新聞社会事業団コドモの本編集部発行の『コドモの本』に、1934年6月と7月の二回にわたって「松太と鉄砲」という童話作品を発表していたことが確認されたので、本稿ではこの作品について紹介してみたい。

ただし、悦田慶一氏の談話にある「すばらしい童話」に「松太と鉄砲」が該当するかどうかについては、今後の調査を俟たなければならない。「すばらしい童話があった」という悦田慶一氏の談話が、「未発表原稿」にのみかかるのであれば、「古い雑誌」に発表された「松太と鉄砲」は「すばらしい童話」には該当しないことになるであろう。

また、悦田喜和雄「順吉」（『文化公論』1934年2月）⁴という自伝的要素を多く含む小説には、主人公の順吉が「今の気持を童話に書いて見ようと思つた。その日もそれを書くために、いつも持つてゐる、雑記帳に紐をつけて、その紐に短い鉛筆をゆはへつけたものをだしてこぼで休んで書いてみた。」という記述がある。その内容は以下のようなものである。

順吉はこぼに下りて、木をこぎりながら今書てゐるものゝことを考へた。

——まだ人間が穴の中に住んでゐた頃。穴の中に十二三人の人間が一人の女王様を守つて住んでゐる。順吉は久しぶりにこれがよいものになりさうなので嬉しかつた。

——女王様は人間どもの毎日の働きを見て、非常に喜んで、夜は疲れた人間どもの心を慰めるため、うたをうたつたり踊つたりする。人間どもはその綺麗な声や、踊を見ては一日の疲れをいやし、夜はとつぷり眠り、朝は早くから起き夜の女王様のうたや、踊を楽みにして一生懸命にたち働く。順吉は繰り返し／＼考へながらこぎつた。

この箇所順吉が構想を練っている童話作品は、「松太と鉄砲」とはまったくの別物である。こうしたことを考え合わせると、今後、「松太と鉄砲」のほかに悦田喜和雄の未紹介童話作品が発見される可能性は十分にある。

3 「順吉」と「松太と鉄砲」

本章では、悦田文学における「松太と鉄砲」の位置づけについて考えてみたい。その際、「松太と鉄砲」と同じ時期に発表された「順吉」（『文化公論』1934年2月）と照合しながら考えていきたい。

「順吉」は、小説を読むことや書くことが好きな順吉が、父の死を契機として農業に力を入れる決心をする物語である。自伝的な要素の濃い作品であり、武者小路実篤や滝田樗陰とのやり取りを連想させる記述も多く見られる。

一方、「松太と鉄砲」は、鉄砲好きで名人でもある松太を主人公として、鉄砲の腕比べをめぐる友情が育まれる前半部と、父の死を契機として鉄砲をあきらめ農業に専心する松太の姿が描かれる後半部とによって構成されている。

⁴ 悦田喜和雄「順吉」については「小説「順吉」」（『徳島県立文学書道館研究紀要 水脈』2003年7月）に翻刻が掲載されている。本稿の引用は初出誌を用いた。

「順吉」と「松太と鉄砲」とは、自伝的作品と童話との違いはありながらも、主人公が熱心になって取り組んでいた活動を、父の死を契機としてあきらめることで、それ以後は農業に熱心に取り組む決意をするという構成的な類似が見られる。以下の引用は、父の死に際してのやり取りである。

「順吉よ、とと（父）はお前が本を読むことをいつも心配してみたんぢや、もう本読まずに、精出して百姓の仕事するつて云ふてあげ！」午後になつて母がかう云つた。

（中略）

たう／＼順吉の父は死んでしまつた。

順吉は仏壇の前に寝た、ほゝ笑んだやうな父の顔の上で、何度も何度も家を逃げ出して、心配かけて済まなかつたことのお詫びをした。（「順吉」）

『お前に今まで俺が何度云つても鉄砲をやめなかつたが俺はもう死ぬのだ。今死ぬ俺にもう一生鉄砲を持たない約束をしてくれまいか、これがもう一生のお願ひだ』すると俯向いてみた松太は、眼に涙を浮かべて云ひました。

『それでは鉄砲のことは思ひきります。今後鉄砲は持ちません！』松太がかう約束をすると、父はその次の日、とうとう死んでしまひました。（「松太と鉄砲」）

また、父の死の後も好きなもの（順吉の場合は小説であり、松太の場合は鉄砲）が思い切れない時に、夢を見たことを契機として農業に熱心に取り組む決意をするという点も類似している。

寢床の中で自分をほめてくれた色々の言葉を考へ／＼してゐていつとなく気持よく眠つた。と

「お前もう仕事せずに遊んでゐてつか、わしがうん働くけに！」順吉は煙草を吸つて休んでゐる父にかう云つた自分をみた。

「お前もう仕事せずに遊んでゐてつか、わしがうんと働くけに！」順吉は又繰返してハツとした。

父は死んだのか生きてゐるのか、順吉の頭はボーとしてゐる。

暫時して、順吉は父は死んだのだ、と気づいた。

「お前もう仕事せずに遊んでゐてつか、わしがうんと働くけに！」順吉は夢であつたことを気づいてからも又繰返してみた。すると、心から熱心に百姓をしてゐたら父は喜ぶのであつたゞらうと思つた。今生きてゐてくれたら熱心に百姓をして父を喜ばせることも出来るのに、と思つた。そして、はね起きて戸外に出た。戸外はまだ暗かつた。——うんと働いて熱心に百姓をやり、誰にも負けぬ百姓になつてやる。かう考へながら順吉は、門口の小川で顔を洗つた。（「順吉」）

「松太と鉄砲」では、大猪に牙を打ち込まれて瀕死になった夢を見た松太が、その夢が「お父様のお諭しである」と思い、それ以後は「鉄砲をすっかり思ひ切」って「百姓に熱心」になるという結末である。

「順吉」と「松太と鉄砲」とは、中央文壇進出期にしばしば取り上げられた、文学によって身を立てる覚悟をもって家を脱出するという悦田の若き日の熱意から、1926年12月の父の死、1929年1月の子どもの出生を経て、家業を継いで熱心に農業に従事する決意を抱くにいたった時期の作品として、悦田文学の転換点に位置づけることができる。

ただし、「順吉」と「松太と鉄砲」とでは、結末部に関して重要な相違点も存在する。「順吉」では、「熱心に百姓をやり、誰にも敗けない百姓になつてやる」という決意は、あくまでその時点における決意の表明に止まっている。それ以後、順吉の決意が持続したのか、あるいはそうした決意をもって農業に臨んだ順吉がどのような生活を送るのかといった点については、述べられていない。一方、「松太と鉄砲」では、以下の通りである。

それから松太は鉄砲をすっかり思ひ切りました〔。〕そして父の若かつた時のやうに百姓に熱心になりました。すると今まで枯れかかつてゐた柿や蜜柑の木も以前のやうに若返り立派な実を結ぶやうになりました。綺麗な柿や蜜柑を見ると、松太は面白くなり、ますます熱心に手入れをしました。やがて父のやうに村一番の柿や蜜柑を作り、立派な稲や麦を作りました。もう松太は以前の鉄砲より、百姓の仕事が楽しくなりました。

このように、鉄砲をすっぱりとあきらめた松太が、それ以後は農業に専念して立派な作物を育てるにいたるという結末は、童話にふさわしく円満な終わりである。

もちろん私たちは、後年まで悦田の文学的熱意が持続することを知っている。そのことから、「松太と鉄砲」の終結を童話的創作として片づけることも不可能ではない。しかし、由良君美が言うように「メルヘン」が「人間の可能性について現実にとらわれた眼玉を、突然、想像力の羽ばたきに乗せて解放してくれるという、他に求めがたい力をもつメディア」⁵であり、またM・エリアーデが指摘するように、そこではしばしば「新しい精神的生命の誕生」に欠かせない「イニシエーションにおける「死」」⁶の物語が現れるとするならば、「松太と鉄砲」の童話的想像力が、とにもかくにも悦田の農業生活に対する「新しい精神的生命」へのヴィジョンを示してみせたと言えるであろう。自分の好きなものを優先することが家業の衰退につながるという認識を引き受け、家業を熱心につとめる新しい自己を立ち上げるというストーリーは、常に自己と家業との矛盾に引き裂かれていた悦田にとって、現実的な要請に応えねばならない自らの生き方をさし当たっては肯定するための安息

⁵ 由良君美「人間性の恒常の相を示すメルヘン」『朝日ジャーナル』1975年12月。引用は由良君美『風狂虎の巻 新装版』2016年5月、青土社。

⁶ M・エリアーデ『生と再生』1971年7月、東京大学出版会

所であったのかもしれない。別の観点から言うならば、童話を書くこと自体のうちに、必然的に大人のまなざしを引き受けることが含まれているはずであり、悦田がいかにか生涯「文学青年」（『四国文学』1966年10月）であろうとしたとしても、やはり一度は通過しなければならない里程碑なのではなかったか。

悦田喜和雄が童話作品を書いたこと、そしてそれが「松太と鉄砲」という作品として現れたことは、「七十歳の文学青年」（『暖流』1966年7月）を自認した悦田喜和雄のうちに、確かな分別のまなざしが存することを私たちに知らせるのである。

4 「松太と鉄砲」の紹介

以下においては、悦田喜和雄「松太と鉄砲」を紹介することとする。紹介にあたって、本文表記は、句読点、符号、仮名遣い、送り仮名、改行など、基本的に原文に従った。ただし、二文字以上のおどり字については「／＼」と表記した。また、誤記や脱落と思われるものは、稿者の判断によって補訂し〔 〕内に示した。



【『ゴトモの本』1934年6月、表紙】



【『ゴトモの本』同左、20頁】

77 そもそも「松太と鉄砲」において、父の清太が松太の鉄砲好きに意見をしたのは、鉄砲が「もつともあぶないもの」だからであった。しかし、結末の箇所において鉄砲好きが否定されるのは、それが家業を疎かにすることにつながるからであった。作中人物の生きている世界の論理を超えたところに、悦田は、自己の好きなものを抑制して家業に努めることを奨励する教訓を、読者である子どもに示すと同時に、自らにも示したと考えられる。

■ 悦田喜和雄「松太と鉄砲（1）」『コドモの本』1934年6月

童話 松太と鉄砲（1）

悦田 喜和雄
小出 卓二（ゑ）

ある村に清太と云ふよく働く百姓がありました。清太は妻の他に松太と云ふ男の子がありました。清太夫婦は松太の大きくなるのを楽しみにして百姓に精を出し、田に稲や麦を作る外に山を開いて箭を作ったり、柿や蜜柑を作りました。清太は田に作る稲や麦や畑に作る柿や蜜柑を非常に可愛がり、親切にせわするので清太の田の稲や麦は村一番によく出来るし、柿や蜜柑も村一番のよい実を結びました。清太夫婦は作物を可愛がるやうに松太を可愛がりました。

だん／＼大きくなつてもう大人になつた松太は大変鉄砲が好きになりました。毎日鉄砲を担いで狩人達の仲間には入つて狩りに出かけました。父の清太は、それを大変心配しました。

『鉄砲はひきがねを引いたらもう何と思つても取返しのつかない、もつともあぶないものである。もしあやまつて人でも射つやうなことがあつては取返しがつかないから鉄砲は思ひ切つてやめてくれ』

と何度云つても松太はやめませんでした。やめるどころか毎日毎日熱心になりたうとう狩人仲間一番の鉄砲の名人になりました。猪狩に行つても松太の射場に来た猪はのがさず射止めました。又遠い向ふの山を飛ぶやうに走る鹿を射止める不思議な腕前を持つてみました。松太があまり鉄砲が上手なので狩人仲間の若い者はひそかに松太をそねんでみました。どうかして松太に大きな失敗をさせて、松太に鉄砲を持たせなくなればきつと自分が狩人仲間一番の鉄砲の名人になれると心ひそかに思ふ者がありました。

ある日、狩人仲間は朝から猪の居る山を探してみましたが、夕方近くまで見つかりませんでした。狩人仲間は疲れきつて、夕日をうけた高い山の上でひなたぼつこをして、色々話をしてみました。中にはたいくつして遠い向ふの石を的にしてそれを射つて見たり、鉄砲の掃除をするものがありました。だん／＼鉄砲のことに話がうつつて行つて、ある一人が、

『誰か二十間向ふで、頭の上に印籠を載せてゐるのを射落すものがあるか！』しかし、これには誰も『俺が射落してみる』と云ふものはありませんでした。すると、いつも松太を心ひそかにそねんでゐる一人が

『松公だつたら射落すだらう鉄砲の名人と云はれる松公でないか！』かう云ひました。松太は黙つてゐました。仲間の間には松太びいきの者と松太をそねむものとの争ひが出来ました。

『名人と云はれる者がそれが出来ぬか！』と松太をそねむ連中は声高く叫びました。すると仲間の中が一番松太びいきの石太と云ふ男が云ひました。

『松公、俺が二十間向ふで頭に印籠を載せて立つてゐるから射落してくれ、俺はお前の腕を信じてゐる。きつとお前はあやまらず射落すことが出来る』そして右太は、又他の者に云ひました。

『松公が見ごと射落したらお前達はどうするか』するといつも松太をそねんでゐる岩公と云ふ、松太に次ぐ猪射の名人が云ひました。

『俺は松公に首を渡す』

『よし、それでは松公やつてくれ、俺が印籠を載せて立つてゐるから！』と右太は松公に云ひました。しばらく考へこんでみた松太は頭を上げ、眼をかがやかせて云ひました。

『よしやらう、右公たのむぞ！』

いよ／＼右太は二十間向ふで頭に印籠を載せて立つてゐました。松太は火縄を吹いて、用意すると、しづかに狙ひました。皆は手に汗を握つて眼もひかず見つめてゐました。やがてズドンとなると、見ごと右太の頭に載つてみた印籠は破けて飛びました。松太びいきの人も松太をそねんでみた人達も思はず手をうつて喜びました。と中に一人青くなつたのが岩太でした。喜んで手をうつた人達も岩太を見ると皆又青くなつてしまひました。

松太が岩太に『首をくれ！』と云つたら岩太はどうするか、と皆は心配しました。

青くなつた岩太は松太の前へ出て、

『松公、俺は敗けた、俺の首を取つてくれ』と云ひました。すると松太は笑ひながら云ひました。

『岩公、もういいよ、俺も命拾ひをしたのだ。もしあやまつて右公の頭でも射つて見給え、俺は人殺しだ。あやまれば俺は自分で鉄砲腹をして死ぬつもりだつたのだ。それが助かつたのだ、嬉しいではないか、お前も喜んでくれ！』と云ひました。すると右公が云ひました。『岩公喜んでくれ、俺も命びろひしたのだ。もし松公の狙ひがあやまつて見給え、俺は松公に射殺されたのだ。それが助かつたのだ、めでたいではないか』これを聞いた岩太は涙をぼろ／＼こぼしながら云ひました。

『俺が悪るかつた。俺はいつも松公をそねみ松公の腕をうたがつてゐた。これでこそ松公の腕前は分つた。俺は感心した。松公は鉄砲の名人だ。』他の者も又松太の腕前をほめました。そしてその日は皆仲よく別れました。この話が村いつぱいにひろがつて父の清太の耳には入ると、松太がそんなあぶないことをしたことに、後のことではあるがはら／＼しました。どうかして松太に鉄砲をやめさせなくてはと、父はいつも考へてゐました。(つづく)

■ 悦田喜和雄「松太と鉄砲(2)」『コドモの本』1934年7月

童話 松太と鉄砲(2)

悦田 喜和雄
小出 卓二(ゑ)

冬がすぎ春になって 筈 が生える頃になりました。松太が 筈 畑 へ猪が出て、 筈 を食つてあるのを見つけて来ました。

『朝がた出て来るに違ひない、明朝は射てやる！』かう松太が云つてゐるのを聞いた父の清太は『こゝぞ！』と強い決心をしました。それは自分が猪になって 筈 畑 に這つて居ればきつと松太は射つに違ひない、親を射てば松太も鉄砲をやめるだらう？ かう考へた清太は朝まだ暗い内からこつそり家を出て、シユロの蓑をきて 筈 畑 を這つてゐました。もう松太が射ちさうなものだと思つて待つてゐると、 後 の方から松太が、

『お父さん、何してゐるんぞえ！』かう呼びかけられた清太に、つつと立つて声の方を見ると、まだ暗くて何にも見えないが十四五間も向ふに火繩の火が見えました。自分の思ふやうにうまく行かなかつた清太は、しかたなく、すごすご家に帰りました。

父がいくら鉄砲をやめて百姓を熱心してくれと云つても松太は少しもききませんでした。毎日毎日鉄砲ばかりいぢつて百姓の仕事は少しもしなくなりました。

年取つた清太夫婦はだんだん仕事が出来なくなり、以前村一番によく出来てゐた田や畑はやせてしまひ稲や麦は出来なくなり、よくなつてゐた柿や蜜柑は次第に実を結ばなくなりました。清太は毎日あせりましたが松太は平気で鉄砲ばかりいぢつて遊んでゐました。だんだん年取つた父の清太はとうとう疲れはてて病氣になりました。医者を呼んで診て貰ふととてもむつかしいと云ふのでした。さすがの松太もそれをきくと、鉄砲をやめて母と二人で一生懸命看病しました。しかし父は一日一日衰弱して行きました。ある夜、清太はしづかに松太に云ひました。

『俺はお前にどうしてもきいてもらひたいことがある。きいてくれるか！』

『はい、どんなことでもお父さんの云はれることはおききいたします。』と松太は父の枕もとに手をつき頭を下げました。父はキヨロキヨロ松太の顔を見て云ひました。

『お前は今まで俺が何度云つても鉄砲をやめなかつたが俺はもう死ぬのだ。今死ぬ俺にもう一生鉄砲を持たない約束をしてくれまいか、これがもう一生のお願いだ』すると俯向いてゐた松太は、眼に涙を浮かべて云ひました。

『それでは鉄砲のことは思ひきります。今後鉄砲は持ちません！』松太がかう約束をすると、父はその次の日、とうとう死んでしまひました。

父が死んでから鉄砲持つ手に鋏を持った松太は、毎日田や畑で働きましたが何だか淋しくしてやりきれませんでした。畑に行つても鋏を休めて鉄砲のことを考へました。鋏の柄で向ふの山の石を狙つて見たりしました。家に帰ると、たまをこめてない空鉄砲で柿の木に来て啼いてゐる小鳥を狙つて見たりしました。そんな風に毎日毎日やつてゐるので田や畑は次第に荒れ柿や蜜柑の木は枯れ掛りました〔。〕

とある夕方でした。もう鉄砲をやめた松太を知つてゐるはずの一人の狩人が松太を呼びに来ました。それは暗谷山と云ふ大きな山で牛ほどもある大猪が手負になつてどうしても射止められないから松太を呼びに来たのでした。松太は待ちかねてゐたやうに喜んで鉄砲

を担いで暗谷山へ行きました。もう夕方で向ふが暗い頃でした〔。〕松太の前の射場で射外した猪は、又松太の次の射場も射外しました。次に来るのが松太の射場でした。待つてみた松太は狙ひすましてひきがねをひきました。射止めるはずの松太の鉄砲も不思議に狙ひがはずれました。あれくるふ手負の大猪はたちまち大きな牙で松太をかけ倒しました。牙をうちこまれた松太の腹からは腹わたが出て、松太はウンウンうなりました。もう息が窒つて次の息が吹き返せなくなつた時でした。

『松太！松太！』とやさしく呼ぶ声がしました。ふと気がついた松太は、今のが夢であつたことに気づいてほつと溜息をつきました。そして、これはお父様のお諭しである。お父様がなくなる前にも鉄砲のことは思ひ切ります〔、〕もう鉄砲は持ちませんと約束しながらやはり鉄砲のことは思ひきらず、ひまさへあれば空鉄砲で狙つて見たりしてゐたから、そのお怒りだと松太は深く感じました。

それから松太は鉄砲をすっかり思ひ切りました〔。〕そして父の若かつた時のやうに百姓に熱心になりました。すると今まで枯れかかつてゐた柿や蜜柑の木も以前のやうに若返り立派な実を結ぶやうになりました。綺麗な柿や蜜柑を見ると、松太は面白くなり、ますます熱心に手入れをしました。やがて父のやうに村一番の柿や蜜柑を作り、立派な稲や麦を作りました。もう松太は以前の鉄砲より、百姓の仕事がたのしくなりました。そこで、松太はこれだけたのしく百姓が出来るやうになつたことを喜び、お父様のお墓の前に行って、百姓の仕事が何より面白く、たのしく出来るやうになつたことをお礼申し上げました。(終)